

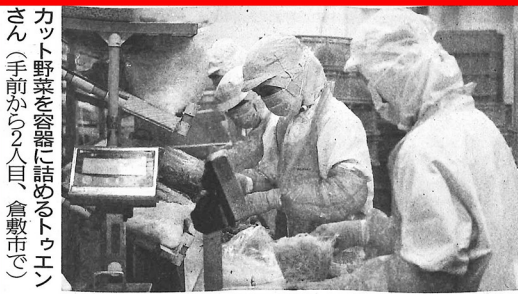
読賣新聞

2022年(令和4年)5月8日(日曜日) 頁 第 頁 第 頁

検証 技能実習制度 暴行事件から

「途上国への技術移転」を目的に創設された実習制度では原則、職場の変更は認められず、家族の帯同もできない。人権侵害も多発している。それでも、県内には懸命に働く実習生がおり、ともに歩む存在として支えようとする人々がいる。

倉敷市の食品加工会社「倉敷青果」の工場では、多数の従業員がコンベヤーを流れる容器にキャベツやタマネギといったカット野菜を次々と詰め、サラダにしていた。県内のスーパーなどに出荷する商品で、日本人にまじり、帽子と手袋姿で手際よく作業にあたるのは、ベトナムなどから来日した約30人の実習生だ。富本尚作専務(70)は「今や実習生は売り手市場。うちを選んでもらえるよう、コストはかかるが、あらゆる手を尽くしている」と語る。面接で

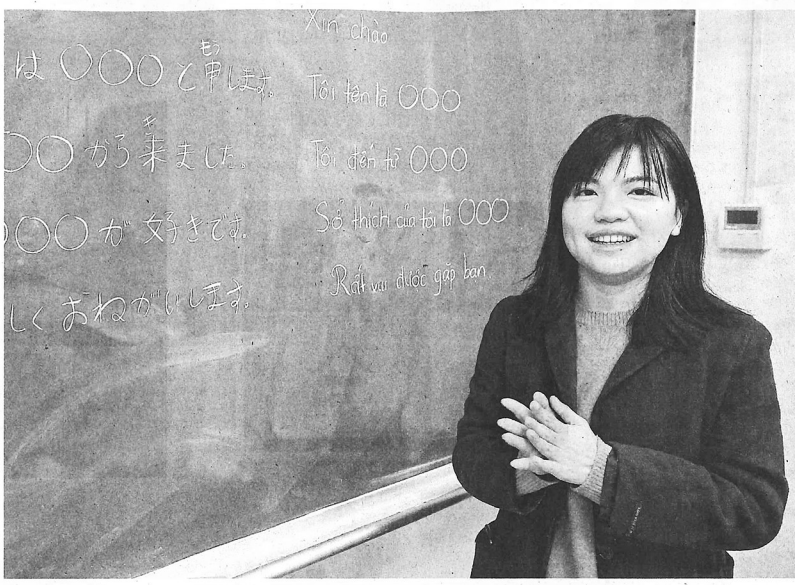


カット野菜を容器に詰めるトウエンさん(手前から右へ、倉敷市で)

共に歩む支える動き

無関心が生むゆがみ

「入所者からも『やさしくてまじめ』と評判です」。特別養護老人ホーム「あすなろ園」(倉敷市玉島勇崎)で、中塚裕之園長(47)の言葉に、グエン・ティ・ティン・ガーさん(25)は照れくさそうな表情を浮かべた。2020年10月に来日。同園では実習生も含め、約20人の外国人が入所者の入浴や食事など、身の回りの世話をしている。介護の現場ではコミュニケーションは必須。日本人職員のサポートもあり、本人はN1とN5の5段階に分かれる日本語能力試験で、日常よりも幅広い場面です話ができる「N2」を取得した。岡山弁の高齢者の言葉



●身近な実習生の存在に目を向けてほしいと話すピックチャンさん(岡山大学)と中塚園長(左)らに仕事を褒められ、笑顔を見せるガーさん(中央、倉敷市で)

「地方の介護職は、特に若い日本人のなり手がいない」と中塚園長。ガーさんは「もともとみんなと話せるようになって、日本のことを知りたい」と、「N1」取得を目指している。

ベトナム中部のフエ出身で、岡山大学院生のホアン・ゴック・ピックチャンさん(24)は、オンラインで週に1回、実習生を対象に日本語教室を開いている。きっかけは、

20年から、他の留学生らと協力し講座を開始。毎回15人ほどが参加し、道の尋ね方やゴミを捨てる方法など、実践的な言葉や文化を学ぶ。「日本語が分からないと、コミュニケーションから疎外され、分断は無関心を生み、地域でも見えない存在」にされる。少しでも日本語で気持ちを伝えることで、距離が縮まる

ベトナム人男性(41)が暴行を受けていたのは、私が住む岡山市内。取材で出会ったトウエンさんが作ったサラダを、私は普段から口にしていた。実習生は遠い存在ではない。暴行事件で浮き彫りになった制度のゆがみを、放置して良いはずがない。(この連載は、上方俊弥が担当しました)